

牛ヘモプラズマ感染症の症状と対策

丹後家畜保健衛生所

○田中義信 川島康成

かつてリケッチアに分類されていたヘモプラズマは、赤血球表面に寄生するマイコプラズマの総称で感染すると溶血性貧血を呈する。管内で牛ヘモプラズマ感染症が疑われる牛を確認したため、その調査と対策を実施した。2017年3月～7月に管内の牛飼養農場3戸で重度貧血を呈し4頭死亡した。死亡前のEDTA加血ではHt 11.4～21.4%、TBIL 0.7～2.9mg/dL、血液塗抹で赤血球表面に赤色点状物、有棘赤血球多数が観察された。そのうち1頭の剖検所見で粘稠性胆汁貯留、脾腫、黄疸がみられた。管内14農場で貧血、発熱、下痢、肺炎、皮膚真菌症、流涎、持続性卵巢静止、流産、脱毛を呈した148頭にも赤血球表面に赤色点状物が観察され（常温保存、Diff-quick染色）、体毛からシラミ及びハジラミが多数検出された。そのうち34頭のEDTA加血（-80℃保存）をMycoplasma wenyonii（Mw）についてrealtime PCRによる熱解離曲線分析したところ33頭が t_m 値82.8℃、195bp付近を示し、さらに5頭の塩基配列解析で3頭がMwと一致したことからMwの関与が疑われた。まん延防止のため、テトラサイクリン系抗生剤とピレスロイド系プアオン駆虫剤等を併用し6農場で定期投与したところ、6か月後に貧血、脱毛、持続性卵巢静止が回善した。以上のことから赤血球表面に赤色点状物が検出される牛はヘモプラズマ感染の可能性がある、貧血だけでなく様々な症状を呈する可能性が示唆された。